

匠、瑳探訪

④

カネとタイコ

改修された飯高寺講堂に3月上旬、タイコ（太鼓）の音が響きわたりました。この日、銚子から多古にかけての日蓮宗寺院の信徒が一同に集まり、タイコを打ち鳴らし、お経（題目・だいもく、南無妙法蓮華経）を

となえる、「題目講」という行事が行われました。

それぞれのお寺では、題目講が組織され決められた日に集まり行事を続けています。今回のように周辺の題目講が集まって一緒に行うことを「飯高組大題目講」といいました。その中心となる人を講元、講長といい、

コをたたくうちに芸にすぐれた者が自然発生的に始めたものでしょう。
現在につながる題目講は1640年の飯高村がもつとも古く、日蓮の500遠忌（おんき・年忌）にあたる1781年ころには地域のほとんどの村ごとに題目講が結成されていました。日蓮宗では、個人が手に持ったたく「うちわ太鼓」が知られています。

タイコは神楽やお祭り、盆踊りなどには欠かせぬものですが、カネ（鉦）も同様です。祇園祭などの囃子（はやし）では「当たり鉦・すり鉦」が使われ、鳴らし方で多彩な音色が出ることから祭りを盛り上げます。

カネはまた念仏講などの仏教行事にも使われています。しかし、造られた年号や寄付した者の名が刻まれている例は少なく歴史を語ることはできません。

また、太鼓では平成9、12年にアメリカ公演し、現在でも年間30公演をこなすという「のさか太鼓」が注目されています。平成4年に旧野栄町に「和太鼓」響きの楽団として結成されました。

今回の大題目講によって、曲打ちが復活されると聞きます。のさか太鼓とともに継承されることが望まれます。



曲打ちの様子（写真中央上）

1908（明治41）年から昭和53年までの70年間、71代の講元名簿が見つかりました。飯高組には旧八日市場市飯高地区だけでなく、方田や川島、玉造など多古町、鎗木や万力など旧干潟町から旧山田町の小川にかけ広い地域の集落が参加していました。しかし、最近では途絶えています。題目講のタイコのため方はどこの講でもほぼ同じですが、中には「曲打ち」といって変化のある打ち方があります。これについて尋ねられましたが、記録に残るものはなく、各題目講が競ってタイ